

びわこの 考湖学

28

「三成に過ぎたるもの二つあり、島の左近と佐和山の城」と後世になって形容される佐和山城は、慶長5(1600)年天下分け目の関ヶ原合戦で西軍を率いた石田三成の居城として、全国的に有名です。三成にとつての佐和山城が、どのように「過ぎたる」城であったのでしょうか。そこで、今回は佐和山城について考えてみることにします。

彦根市佐和山町に位置する佐和山城は、山裾からの比高差約130mの佐和山山頂にある山城です。築城時期は不明ですが、下街道と中世東海道(後の中山道)に近接し、大手は写真にみられるように現在の鳥居本側にあります。

湖東と湖北の境目に位置することから、戦国時代以降、当初は六角氏と京極氏が、その後六角氏と浅井氏がこの地

域をめぐる争奪戦を繰り返したことが知られています。元龜2(1571)年以降は織田政権と豊臣政権における拠点としての役割を担いきました。

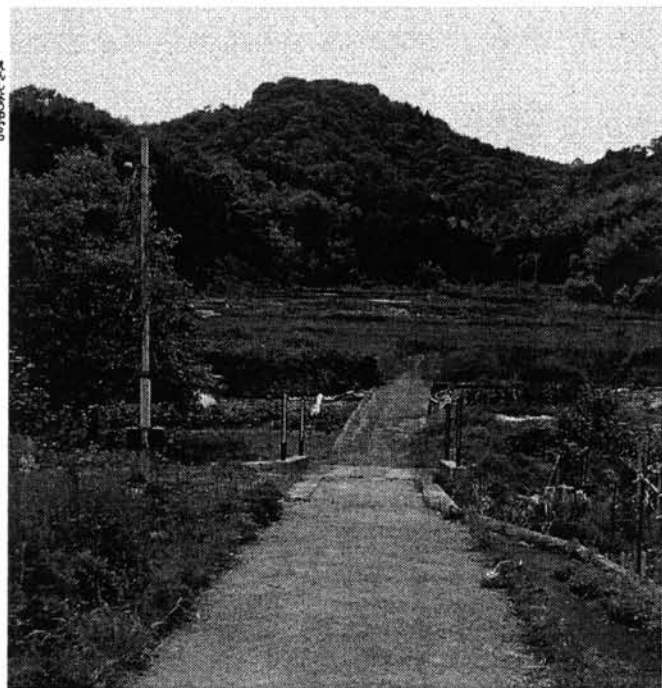
天正19(1591)年、三成は代官として佐和山城に入り、文禄4(1595)年には城持ち大名となりました。しかし、慶長5(1600)年関ヶ原合戦において、三成が徳川家康率いる東軍に大敗を喫すると、佐和山城は攻められ、落城しました。

その後、徳川四天王の一人で佐和山城攻めに功績があった井伊直政が入城しました(慶長8(1603)年から始まった彦根築城に伴い、廃城となりました)。

佐和山城の構造について簡単にみてみましょう。

佐和山城は、山頂の本丸を中心に各尾根上に法華丸、太鼓丸、二の丸、三の丸、西の丸

佐和山城



佐和山城の大手門が建っていた場所から望む佐和山。山頂には本丸があった
—彦根市

丸、煙硝櫓^{えんしょうろう}を配し、土塁や尾根を断ち切るための堀切が各所に設けられています。

佐和山城の石垣は、彦根築城の際に、ほとんどの石材を再利用したため、わずかに本丸、二の丸、太鼓丸の一部にしか残っていません。また、物があったといえます。ま

た、古文書には天守があったことが記されています。意外に思われるかもしれませんが、このように佐和山城は瓦・天守・礎石建物を備えてはいたものの、近世以前の城に一般的にみられる土造りの戦国期の城郭をベースとして、主要部分にのみ石垣を設ける構造でした。同時期の豊臣系大名の城は総石垣の構造が主流なので、それと比べると最先端の城郭ではなかったといえるでしょう。

なぜ、このように当時としては古い要素が残っている城が、「三成に過ぎたる城」と後世に謳われたのでしょうか。そこには、いまだ明らかにされていない謎が隠されているのかもしれませんが。

中世と近世のはざまにおける城の構造の変換期の様子を示す希少な事例として、大変貴重な存在といえるでしょう。

(滋賀県文化財保護協会)

金松誠

後世に名残す「過ぎたる城」